

主 題：罪と向き合う2

聖書箇所：ローマ人への手紙 6章3－4節

パウロが宣べ伝えていた「恵みによる救い」のメッセージにある人々は反対をしました。彼らはこのようなメッセージを語ったなら、人々に罪を犯すことを奨励することになると反対したのです。というのも、この人々は主なる神の恵み、また、救いを正しく理解していなかったからです。そのことはすでに見て来ました。彼らは言い続けます。「罪は赦されるのだから何をしてもかまわない。好きなように生きて楽しめばいいんだ」と。そのように考える人々が増やされて行く、それが反対者たちの言い分でした。パウロはそのように反対する人々の反論を想定した上で、それに答えることで、その間違った教えによって翻弄されているクリスチャンたちに確信を与えようとするのです。

そこで、私たちは第一の質問を見ました。パウロは一つ目の想定する質問を1節で述べました。「**恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか。**」、罪が赦されることによって神のすばらしさが明らかになるとするなら、私たちはもっと罪を犯すべきではないか、そうすれば、私たちは神のすばらしさを証する機会を神に提供することになる、だから、実は、罪を犯すということは神にとって役立つことをしているのだと、このような考えをもつ人たちがいたのです。そこで、パウロはそれに対して真っ向から反対し、その考えを否定しました。「**絶対にそんなことはありません。**」(2節)と。パウロはその理由を述べました。前回、私たちは2節を見ました。パウロはクリスチャンたち、信仰をもった人々はどのような人なのかということ話し始めるのです。

☆新しい人、生まれ変わった人、—— キリスト者はどのような人であるか？

A. 罪に対して死んだ者 2節

クリスチャンは新しく生まれ変わった者です。そのことを教えることによって、だから、クリスチャンはこれまでと同じ生き方はできないと教えるのです。すでに見たように、2節で最初にパウロが教えたことは、クリスチャンは「罪に対して死んだ者」だということでした。これはクリスチャンたちが持つ典型的な特徴を表わしている、罪との関係における特徴です。「罪の中に死んでいた者」たち、つまり、救われていなかった者たちが、「罪に対して死んだ者」となる、そのように私たちは生まれ変わったのです。「私たちは罪との新しい関係をもつ。これまでの関係とは違う。」とパウロは言ったのです。つまり、これまでの主なる神を信じない、その方に感謝もささげない、その方に従って行こうともしない生き方が間違った罪の生き方であることを知って、その罪の生き方に訣別することを決心するのです。「これまで私は間違っていた。だから、そのような間違った生き方、神に逆らう罪の生き方は止めよう」と。そして、神の前に正しく生きて行く決心をするのです。そして、その結果がどれ程大変であっても、主に従って行こうとします。ですから、救いは一人ひとりの決心であると見たのです。

このように見たとき、聖書の教える救いは私たちの周りに存在する人間の作った宗教とは違うことが明らかです。ご利益宗教ではないのです。何か自分の欲しいものを手に入れるために信じるものではないのです。正しいことだから信じるし、間違っていることだから止めるのです。たとえば、ある人が自分の間違ったことを今謝っておけば自分にかかる被害が最小限で済むとか、天国に行きたいから、また地獄に行きたくないから信じる、健康になりたいから金持ちになりたいから成功したいから信じる、将来のことが不安だから心細いから信じる、また、悪いことが起こるのが嫌だから罪の告白をしようという、そのような思いが正しくないことは私たちは知っています。私たちは主の前に謝るべきことだから謝るのです。たとえ、その結果がどんなに大きな犠牲を払うことになっても、これは間違ったことだから止めよう、私は正しいことをして行こうとする、それが聖書が私たちに教える信仰です。

これはまさに、あの放蕩息子の態度に見ることが出来る、正しい神が求めておられる心の態度です。思い出してください、ルカの福音書15章に出て来る話です。ある人に二人の息子がいて弟の方が自分の財産をもらって放蕩をし、もらった財産をすべて使い果たした後、落ちる所まで落ちた時に、聖書はこのように記しています。「**我に返ったとき彼は、**」と。ルカ15：17です。「**我に返った**」彼はこのように言います。17節に続いて『**父のところには、パンのあり余っている雇い人が大ぜいいるではないか。それなのに、私はここで、飢え死にしそうだ。**』、だから帰って私はここの息子なんだと、かつての特権を主張して今までと同じ生活をしようとしたのでしょうか？いいえ、彼はこう言いました。18節「**立って、父のところに行って、こう言おう。「おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。：19 もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください。」**」、当然、父親から「NO」と言われる可能性もあるのです。でも、彼は「もしかすると、父は私を拒むかもしれない。受け入れて

くれないかもしれない。でも、結果がどうあろうと、私は今自分が間違っていたことに気付いたから、私は神の前に正しいことをしたい。父の前に正しいことをしたい。」とその選択をしたのです。これをするなら何かもらえるからするのではない、何ももらえなくても私は正しいことをする、間違っただけは止めますと、それが聖書が教える救いだと言われ、私たちは見て来ました。パウロは2節で「**どうして、なおもその中に生きていられるでしょう。**」と問いますが、当然、パウロ自身が期待した答えは「否、NO」です。救われた者が継続して罪の中に生きて行くことは不可能だと、それがパウロ自身が期待した答えです。それはパウロだけでなく、神ご自身が私たちに期待される答えでもあります。私たちは生まれ変わった者として、かつての生き方をして神を悲しませ続けるのではなく、神に喜ばれる生き方をもって神に感謝を現わして行くのです。クリスチャンは神から何かをいただくために生きているのではありません。神からいただいたものに感謝をもって日々生きているのです。私たちの毎日の生活はこの方への感謝を現わしながら生きているのです。パウロはこんなに大きな救いという恵みをいただいた私たちに、どうして、これまでと同じ罪の歩みをし続けることができるのか、それは絶対にできないと言ったのです。

B. キリストと結合された者 3-4節

二つ目の説明が3節から記されています。クリスチャンは「キリストと結び合わされた者」だと教えます。「**それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたのではありませんか。**」と。パウロはおもしろいことを最初に言っています。「**あなたがたは知らないのですか。**」、なぜ、あなたたちはそんなに無知なのか？なぜ、そんなに愚かなのか？と言っているのです。というのは、読者たちはすでにこのことは分かっていたはずだからです。でも、何かがあったのでしょうか。彼らは「罪に対して死ぬ」、これがクリスチャンである、今までと同じ生き方ができないのだということを知っているはずなのに、忘れてしまっていたのです。そこでパウロはもう一度この大切なことを彼らに思い起こさせるために、ある「たとえ」を用いるのです。それが3節から出て来る「バプテスマ」です。この3-4節を見ると「バプテスマ」ということばが三回出て来ます。3節には「**キリスト・イエスにつくバプテスマ**」、また、「**その死にあずかるバプテスマ**」、4節にも「**キリストの死にあずかるバプテスマ**」とあります。

◎バプテスマとは？

(1) **字義通り、ことばどおりの意味**：水に浸す、浸ける、また、船の沈没や人が溺れるということなどにも用いられました。旧約聖書のヘブル語をギリシャ語に訳した70人訳では、アラムの王の將軍ナアマンがエリシャからヨルダン川に行き7回身を洗うようにと言われました。第2列王記15章に出て来る話ですが、ナアマンはその通り、7回ヨルダン川に自らを浸すのです。その箇所はこのことばが用いられています。ですから、浸す、浸けるという意味をもったことばです。

(2) **比喩的な意味**：同時に、比喩的な意味を見ると、これは「同一のものと考える、同一視する」という意味です。同じものとして見るということです。たとえば、Iコリント10：2では「モーセにつくバプテスマ」とパウロが教えています。「**そしてみな、雲と海とで、モーセにつくバプテスマを受け、**」、モーセがバプテスマを受けたのではありません。これはモーセがイスラエルの民を引き連れてエジプトを出て荒野を旅し、紅海を渡って行くそのときのことです。そこで彼らはパウロがここで言っている「モーセにつくバプテスマ」を受けたと言うのです。いったい、何のことでしょうか？ここで言われていることは、イスラエルの民がモーセとともに旅をした、彼らのリーダーであるモーセと彼らは一つになった、彼らは一つになって紅海を渡ったということです。先に見たとおり、比喩的な意味でこのことばは「同一視、同一のものと考える」です。その意味でこのバプテスマということばがここで使われているのです。ですから、私たちが考える「水で授けるバプテスマ」ではないことが分かります。モーセと一つ、その意味で「**モーセにつくバプテスマを受け**」とパウロは説明したのです。

ローマ書に戻って、なぜ、パウロはここで唐突にバプテスマということを出したのでしょうか？「バプテスマ」ということを引き合いに出すことによって、すでに水のバプテスマを受けていたローマの信者に、今一度、救いとはどういうものかということをお教えしようとしたのです。パウロはまだ会ったことのないローマにいる読者たちがこの「バプテスマ」をよく理解していることを知っていたのです。彼らにとってバプテスマは非常に分かり易いことばだったのです。だから、そのことばを用いたのです。そして、クリスチャンは生まれ変わった者であり、かつてとは違う生き方をする者だということをお知らせし、思い起こさせようとするのです。なぜなら、このことの底辺にあることは「我々がもっと罪を犯せば神がご自身の栄光を現わす機会を多くもつことになる。だから、我々はもっと積極的に罪を犯して行こう」という考えがあって、それに惑わされていたクリスチャンがいたからです。彼らに対してそれが間違っているということをお知らせしようとするのです。

皆さんはこのことをよく理解しておられることと思いますが、それは水のバプテスマ、一般的に「洗礼」と言われること、それを受けることによって救われることは決してないということです。なぜ、「洗

礼」を受けることによって救われないのか、それは聖書が教えるように、いかなる行ないをもっても救われることがないからです。パウロはそのことをこのローマ書3-5章ですでに私たちに教えてくれました。

◎行ないによっては救われないこと

ローマ3：20「なぜなら、律法を行なうことによって、だれひとり神の前に義と認められないからです。…」、たとえ、どのような良い行ないをあなたが行なったとしても、それによって救われることは絶対にはないと言うのです。

ローマ3：28「人が義と認められるのは、律法の行ないによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです。」、パウロは繰り返してそのことを教えて来ました。イエス・キリストを信じる信仰だけが罪人を救うのです。どのような行ないも、「洗礼」を受けてもその行ないは絶対に人を救いません。

エペソ2：9「行ないによるものではありません。だれも誇ることもないためです。」、救いは神の一方的な恵みであって、信じる信仰によって信じた者に与えられるのです。いかなる正しい行ないであっても、たとえ、それが水のバプテスマ、洗礼であってもその行ないは人を救わないのです。そのことは皆さんよくご存じです。水のバプテスマではなく聖霊のバプテスマによって救われるということを知っておられるでしょう。

テトス3：4-5でこのような教えを与えています。「**4** しかし、私たちの救い主なる神のいつくしみと人への愛とが現われたとき、**5** 神は、私たちが行なった義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちを救ってくださいました。」、救いというのは「私たちが行なった義のわざによってではない」、私たち罪人が救われるのは神ご自身の「あわれみのゆえ」だと言います。そして、その「あわれみ」はどのような形で現われたのでしょうか？「**聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちを救ってくださいました。**」と書かれています。この部分をもう少し明確にするならこのようになります。「新生の洗いと聖霊による更新」です。この二つのことがここで教えられているのです。残念ながら、新改訳聖書では分かりにくいのですが、この箇所のこと語訳聖書では「私たちが行なった義のわざによってではなく、ただ神のあわれみによって再生の洗いを受け、聖霊により新たにされて私たちは救われたのです。」とあります。(a) **新生の洗い**：神によって罪が洗われるということです。救いのことです。私たちは自分の罪を洗うことは出来なかった。神が私たちの罪を洗ってくれたのです。罪が洗われたから赦されたのです。しかも、「だれによって」ということまで書かれています。(b) **聖霊による更新**：「更新」とは古いものを変えて新しくするということです。聖霊によって新しくされるということです。「新生」です。ですから、パウロはここで私たちが何かをしたから神が救ってくれるのではない、神が一方的に私たちをあわれんでくださって、私たちをその罪から洗ってくださり聖霊によって私たちを生まれ変わらせてくださると言うのです。新しい者にしてくださったのです。すべて、救いは神のみわざであるということを知っているのです。「水のバプテスマ」は人によって為される礼典のひとつです。「聖霊のバプテスマ」は主なる神によるみわざです。

そのことに関してもう一箇所見たいのは、ヨハネの福音書1章でバプテスマのヨハネがイエス・キリストにバプテスマを授けたところです。興味深いことが記されています。ヨハネ1：33-34「**またヨハネは証言して言った。「御霊が鳩のように天から下って、この方の上にとどまられるのを私は見ました。33 私もこの方を知りませんでした。しかし、水でバプテスマを授けさせるために私を遣わされた方が、私に言われました。『聖霊がある方の上を下って、その上にとどまられるのがあなたに見えたなら、その方こそ、聖霊によってバプテスマを授ける方である。』**」、ですから、水のバプテスマは人間のわざです。でも、聖霊のバプテスマは神のみわざです。神が救ってくれるのです。罪人は神によって罪が赦され救われたときに「聖霊によるバプテスマ」を受けるのです。そして、「聖霊のバプテスマ」を受けた者がその後「水のバプテスマ」を受けるのです。この順序は決して変わってはならないのです。

皆さん覚えておられますか？コルネリオというイタリア隊という部隊の百人隊長だった人のことです。使徒たちは出て行って福音を伝えました。パウロは異邦人のところに出て行って福音を伝えました。ペテロも出て行きますが、初めて、この異邦人であるコルネリオと神の摂理によって出会うのです。ペテロはこの異邦人のところに伝道に行くことを渋りましたが、神はペテロを用いてこの異邦人にキリストの福音を伝えさせるのです。ペテロ自身も神が導いておられることを確信しました。コルネリオの家に集まっていたこの家族を含む人々が救いへと導かれることが「使徒の働き」10章に出て来ます。44節からこのように記されています。「**ペテロがなおもこれらのことばを話し続けているとき、みことばに耳を傾けていたすべての人々に、聖霊がお下りになった。45 割礼を受けている信者で、ペテロといっしょに来た人たちは、異邦人にも聖霊の賜物が注がれたので驚いた。46 彼らが異言を話し、神を賛美するのを聞いたからである。そこでペテロはこう言った。47 「この人たちは、私たちと同じように、聖霊を受けたのですから、いったいだれが、水をさし止めて、この人たちにバプテスマを受けさせないようにすることができましようか。」48**」そして、

イエス・キリストの御名によってバプテスマを受けるように彼らに命じた。彼らは、ペテロに数日間滞在するように願った。」、初代教会の時代には、確かに、様々な奇蹟が伴いました。というのは、このような働きはユダヤ人だけでなく異邦人にも起こることを明らかにするためです。神はユダヤ人だけを愛しているのではない、異邦人も同じように愛しておられること、そして、ユダヤ人だけでなく異邦人も同じように救われるということの人々がはっきり理解するために、このような特別な奇蹟が行なわれたのです。そのことを目の当たりにしたペテロたちは神のみわざをともに賛美したのです。47節に「**この人たちは、私たちと同じように、聖霊を受けた…**」とあります。彼らは救われたのです。そして、その後、水のバプテスマを受けたのです。

ある人はこのように言うかもしれません。「救いをいただくのでなければ、なぜ、水のバプテスマ、洗礼を受ける必要があるのか。聖霊のバプテスマを受けたらそれで良いではないですか」と。主の恵みによって救われた者に対して、主なる神はどうして水のバプテスマを受けることを命じておられるのでしょうか？もし、皆さんの中にこの質問をもっておられる方がいるなら、お答えしなければいけません。簡単に言うなら、それは救われたことの証のためです。私たちが実際に水に浸かり水から出て来るということは、すでに、主イエス・キリストが私たちのために為してくださった救いのみわざを公に証するのです。水に全身が浸ることは死を意味し、そこから上がって来ることは死からのよみがえりを表わしているのです。「私はキリストとともに死に、キリストとともによみがえった」と。ですから、水のバプテスマを受けることは「私は神によって救われた。神の恵みによって救われた。」ということ公に証する機会なのです。信仰によって救われた人が、主なる神によって為された救いのみわざを形をもって現わすこと、それがこの「水のバプテスマ」なのです。

そのことを頭に入れてもう一度今日のテキストに戻ってください。パウロは聖霊によるバプテスマ、そして、水のバプテスマを受けたローマのクリスチャンたちに、今一度救われた者とはどういう者たちなのかということをおもひ起こさせようとしていると最初に話しました。神の恵みによって救われた者は「罪に対して死んだ者」であり、そして、二つ目に「キリストと結び合わされた者」であると。3節でパウロはこのように言いました。「**…キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた**」と、そして、その次には「**…その死にあずかるバプテスマを受けた**」とあります。こうして日本語で見ると、「キリスト・イエスにつくバプテスマ」と「死にあずかるバプテスマ」とことばが違いますが、ギリシャ語では全く同じ前置詞を使うのです。ですから、それを訳すとこのようになります。「**キリストにつく**」というのは、キリストの中へ、また、キリストの「**死にあずかる**」というのは、キリストの死の中へと。パウロが教えたかったことは、イエス・キリストを信じる者たちはイエス・キリストと結び合わされた、結合した、主イエス・キリストと一つにされた者だということです。イエスと特別な個人的な関係に入れられたのです。このバプテスマに関して、キリストとともに、キリストと一つにされたということに関して、パウロは3-4節で二つのことを教えています。

◎キリストと結合したとは？

1) 主イエスとともに生きる者 3節

3節「**キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた**」、先に話したとおり、これはキリストと特別な関係に入れられたということです。イエスを信じた者は神の子どもとされました。私たちは創造主なるこの真の神を私たちの父と呼ぶことができるのです。パウロがエペソ2：12-13で教えたように、私たちはかつてはこの神の祝福からかけ離れたものでした。「**そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人たちでした。**」、これが私たちだったと言います。私たちは神から引き離されて何の希望もなく、約束されているのは永遠の滅びでしかなかったのです。しかし、13節に続きます。「**しかし、以前は遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスの中にあることにより、キリストの血によって近い者とされたのです。**」、そのように神のすばらしい祝福と無縁であった私たちが、その祝福の中に招き入れられたのです。私たちは霊的に死んでいた者でしたが、その私たちが霊的に生きる者とされたのです。永遠のいのちをいただいて神とともに永遠を過ごせる、そのような祝福の中に招き入れられたのです。私たちはキリストとともに生きる者とされたのです。6：5を見ると「**もし私たちが、キリストにつぎ合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。**」と書かれています。「**つぎ合わされて**」、枝が幹につながるように継ぎ合わされるのです。

イエスが「**わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。**」（ヨハネ15：5）と言われたことを思い出されるでしょう。イエスが最初に言われたことは幹である神につながっていなければその枝は枯れてしまうということです。つまり、救いのことです。救いにあずかることがなければその枝は枯れるのです。そして、燃やされてしまうのです。しかし、そ

の枝が幹につながっているなら、それは生きるのです。そして、つながっている証拠は豊かな実を結ぶことです。だから、実を結ぶということは、その枝がしっかり幹につながっている、つまり、救われているということの証拠なのです。いのちをいただいた者たちはいのちが与えられていることを明らかにします。生きている者にはその特徴があります。ですから、イエス・キリストを信じた者たち、イエス・キリストと一つにされた、結び合わされたということは、この主のいのちをいただいたということです。だから、この方とともに生きるのです。クリスチャンの皆さん、確かに、私たちは天国に行つてこの主とともに永遠を過ごします。でも、今も私たちはこの方とともに生きているのです。その方は私たちから遠く離れていません。私たちのうちにいてくださるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」（ヘブル13：5）、「わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」（マタイ28：20）と言われた通りです。私たちは生まれ変わった者です。主とともに生きる者として生まれ変わったのです。主のいのちをいただいた者として今生きているのです。そして、これからも永遠に生き続けるのです。

2) 主イエスとともに死んだ者

二つ目にパウロがバプテスマを受けた者に対して言うことは、あなたは「主イエスとともに生きる者」となっただけでなく、「主イエスとともに死んだ者」であるということです。3節の後半に「**その死にあずかるバプテスマを受けたではありませんか。**」とあります。その説明を4節で詳しく記しています。

(1) 主イエスとともに葬られた

「**私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。**」と。「死にあずかる」だけでない、「葬られた」と言っています。これは、その死が完全なものであるということです。確実に死んだということです。ですから、ここでパウロが言うことは、間違いなく死んだ、あなたは紛れもなく死んでいる、眠っているのではない、仮死状態にあるのでもない、「死んだ」とその現実性を言うのです。つまり、パウロが言いたかったことは、イエス・キリストを信じたあなたはイエス・キリストとともに完全に確実に死んだということです。この3節から23節、6章の終わりまでに、「死」ということばが16回出て来ます。名詞でも動詞でも形容詞でも…。ですから、パウロが言いたいことは「死について」です。クリスチャンというのは、神に逆らい続けて来たこれまでの自分がキリストとともに十字架で死んだ者、完全に確実に死んだ者だと言うのです。もし、病で苦しんでいる人がいてその人が苦しみ続けるのはいつまででしょう？死を迎えるまでです。それ以降は苦しむことはありません。たとえば、何かの中毒になったとして、その人がそのとりこになっている期間は死ぬまでです。死んだらもうそのとりこから解放されるのです。死んだ後もなお苦しみ続けたりとりこになり続けるということはないのです。そのような生活は終わったのです。だから、パウロが言うことは「かつてのあなたはもう終わった、死んだ」と、そして、「あなたは不治の病に罹っていたけれど奇蹟的にそこから治った、それなのに、どうしてその病にもう一度罹ろうとするのか、有り得ないことだ。」です。私たちもよく聞きます。奇蹟的に助かった人が、この与えられた人生を後悔のないように生きて行きたい、死んで当然だった私がこうして生かされている、人生を無駄にしたくないと言います。クリスチャンになってもそう言うのです。私たちも生まれ変わったのです。かつての自分は死んだのです。そして、神が私を生まれ変わらせてくださって新しい人生を託してくださった、なぜ、その人生を神を悲しませる生き方をもって歩み続けて行こうとするのか、そんなことは有り得ないと言います。

(2) 主イエスとともによみがえる

生まれ変わった者には新しい生活が始まります。なぜなら、キリストとともに死んだ者はキリストともによみがえるからです。イエス・キリストと一つにされた者たちはイエス・キリストが死んだように死に、イエス・キリストがよみがえったようによみがえるからです。そのことをパウロはこの4節の後半で「**それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあつて新しい歩みをするためです。**」と言い、そして、8節でも「**もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることになる、と信じます。**」と言っています。

a) 主なる神の力によって生きる

パウロは、救われた者たちは主イエスとともに死んだ、主イエス・キリストとともに葬られた、同時に、その人々は主イエスともによみがえると言います。言い方を変えるなら、神の力によって生きる新しい人生がスタートしたのです。ですから、パウロは4節でこのように言います。「**それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、**」と。すでに起こった出来事です。イエス・キリストは完全に肉体をもって死からよみがえって来られた。そのよみがえりに関してパウロは「**御父の栄光によって**」と言います。エペソ1：17でパウロはこのように言っています。「**どうか、私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。**」、つまり、全能の力のことです。この「**栄光**」とは神の無限の偉大さ、美しさ、完全さ、威厳を表

わすのです。「死」という私たち人間がどうすることもできなかつたその大きな力に勝る偉大な力をこの方はもっておられると言うのです。ですから、イエス・キリストの死からのよみがえりというのは、創造主なる神がいかに偉大な力をもっておられるのかということを表わします。どのようなものに対してもそれに打ち勝つ力をもっておられる方、まさに、栄光に満ち溢れたお方だということパウロは教えるのです。ですから、キリストのよみがえりは父なる神の全能の力が明らかにされるのです。

b) 主なる神の力による新しい歩み

ですから、イエスとともによみがえりということ、新しく生きて行くということは、このような主なる神の力を明らかにし、その力によってあなたは生きることができるとパウロは教えるのです。ですから、4節のその後に「**私たちも、いのちにあつて新しい歩みをするためです。**」とあります。なぜ、このようなことを神は為さつたのでしょうか？それは私たちに大きな希望をもたらすためです。確かに、イエス・キリストが死からよみがえつて来たということは、このイエス・キリストによって信じるすべての人の罪が赦される、この方こそが救い主だということが明らかにされます。同時に、救われた者たちが新しい歩みを為して行くために必要な力がこの神にあり、その力があなたに与えられるということの保証なのです。全能の神によって、どんなことでもできるその神の力によって、私たち救われた者は新しい歩みを為すことができるのです。「**歩みをするため**」とは生活のこと、生きることです。しかも、それは「**新しい歩み**」です。これは今までやって来た生活をもう一度スタートするというものではありません。これは「質」や「性質」において新しいもの、これまでの救われていない人の特徴とは全く違う新しい生き方です。新しい生き方をするという特徴をもつのです。救われる前の罪人の特徴は「罪」でした。しかし、救われた者の特徴は「義」、正しさです。なぜなら、みことばを見て行くと、イエス・キリストを信じた者に神が為してくださつたみわざ、それはその者に「新しい心」をくださったということが分かります。エゼキエル36：26：「**あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。**」、神はイエスを信じた者に新しい心をくださった。

Ⅱコリント5：17：「**だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。**」、私たちは新しく造り変えられたのです。

ガラテヤ6：15：「**割礼を受けているか受けていないかは、大事なことはありません。大事なのは新しい創造です。**」、もう一度、神によって新しく創造されたと言います。

エペソ4：23-24：「**またあなたがたが心の霊において新しくされ、：24 真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された、新しい人を身に着るべきことでした。**」、新しい人となつたと言います。

みことばが私たちに教えていることは、私たち神の恵みによって救われた者たちは全く新しい者にされたこと、そして、新しい者として生きて行くための力も神によって備えられているということです。だから、「**私たちも、いのちにあつて新しい歩みをする**」のです。

先ほど読んだエペソ人への手紙4章を見てください。注目していただきたいのは23節「**心の霊において新しくされた**」と書かれているところです。パウロはなぜこのようなことを書いたのでしょうか？彼が言いたいことは「神は心に働く」ということです。神は救いのみわざをなされるときに、その人の心に働かれるのです。だから、救われた人は新しい心をいただくのです。新しい心からは新しい考えが湧いてくるのです。私たちは新しい動機を持ち、そこから新しい行動が生まれて来るのです。創造主なる神を愛して、その方を信じて、その方に喜んで従つて、その方に喜ばれる生き方をもって栄光を表わして行きたいという、かつて私たちが持っていなかつた新しい思いを信者はもつのです。なぜなら、神が私たちの心に働かれるからです。「**心の霊において新しくされた**」とありますが、この「**新しくされた**」というのは現在形です。継続してそのような働きを神は為して行かれるのです。しかも、受身で書かれているのはこのような働きは神ご自身があなたのために為してくださるからです。このような新しい思いをもちながら私たちは歩いて行くことができます。これが救われた者に為される神の働きです。

そして、もう一つ見ていただきたいのは24節にある「**新しい人を身に着る**」というところです。神は私たちが新しく造り変えてくださったのですが、「**真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された**」と、それは神に似た者として造り変えられたと言います。コロサイ人への手紙3：10にも「**新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至るのです。**」とある通りです。アダムは神に似た者として造られました。罪のない完全な者として造られました。しかし、彼は罪を犯すことによって墮落しました。そして、私たちも同じように生まれながらに罪をもつた者です。しかし、私たちがイエス・キリストを信じたときに、私たちは新しく生まれ変わります。造り変えられます。神に似た者として再び造られたのです。「**新しい人を身に着る**」というのは、もうすでに起こつたことだと私たちは見ることができるのです。エペソ4：22に「**その教えとは、あなたがたの以前の生活について言うならば、人を欺く情欲によって滅びて行く古い人を脱ぎ捨てるべきこと、**」と、「**人を欺く**」という

ことばがありますが、これは24節にある「真理」と対比されています。つまり、かつての私たちはそのような「欺く」生活をしていたと言うのです。しかし、私たちが新しく造り変えられたとき、イエス・キリストによって救われたときに、神が要求している「義と聖」を神が私たちに与えてくださり、私たちは生まれ変わったのです。ゆえに、私たちは聖い正しい神の前に立つことが出来るようになったのです。かつての私たちと、そして、救われた私たちをこのように見事にパウロは対比するのです。

今日、私たちは「クリスチャンとはどういう人か」ということのパウロの二つ目の説明を見て来ました。「罪に対して死んだ者」だけではない、私たちは「キリストと結び合わされた者」だと教えられました。それは、「キリストとともに生きる者」であり、「キリストとともに死んだ者」であり、「キリストともによみがえる者」だと言いました。この「よみがえり」というのは未来のことを言っているではありません。もちろん、そのこともあります。私たち信じた者は栄光のからだへとよみがえります。しかし、ここで教えられていることは、私たちはイエス・キリストとともに死んだ者であり、イエス・キリストとともにすでによみがえった者だということです。だから、私たちはパウロが教えるように「いのちにあって新しい歩みをする」のです。いのちを与えられた者として、救われた者として、生まれ変わった者として新しい歩みをして行くのです。そして、それは私たちに与えられている神の助けによって出来るのです。なぜなら、私たちを助けてくれる方は全能の神だからです。イエス・キリストをその死からよみがえらせた全能の神だからです。

皆さん、分かりますか？このメッセージは私たちにすばらしい希望をもたらします。信仰者であるなら、あなたは神の栄光を現わす生き方が出来るのです。神の助けが備えられているからです。私たちがしっかり覚えなければいけないことは、救われた私はどのような者になったのかということです。確かに、誘惑が来ます。罪の中を歩み続けるように、また、罪を犯すならそこに何かすばらしいこと、今、自分が求めている何かがあるように思わせるのです。このような嘘にだまされてはいけません。私たちは罪に対して死んだ者であり、キリストと結び合わされた者です。しっかり自らの心を守らなければいけません。そして同時に、私たちは神を見上げて、神の助けをいただきながらみこころを為して行くのです。それだけでなく、みこころに反することにも神の助けによって勝利し続けて行くことが必要です。私たちは罪の力に勝利したのです。そして、この勝利をキリストは私たちに与え続けてくださるのです。皆さん、どのように神は私を変えて行かれるのか期待しませんか？どのように私のうちに神は働き続けてくださるのか期待しませんか？みことばが私たちに希望をくれます。でも皆さん、そのためには私たちがしっかりみことばに従うことです。神が言われていることに私たちが従うときに、神のみわざが為されるからです。皆さんへのチャレンジは、あなたが聞いたことを神のあわれみによって実践することです。今から、生まれ変わった者として生きてください！生まれ変わった者として、生まれ変わらせてくださった神を証してください！それはあなたに出来ることです。これがパウロのメッセージです。